

最新事情

ビジネス系検定の学習で、
実社会で役立つ知識とスキルを習得する

川崎市立商業高等学校

(神奈川県川崎市)

平成25年に創立60周年を迎えた川崎市立商業高等学校は、平成22年にビジネス教養科を新設。ビジネスに生かせる知識や技術の習得を目指した商業教育に一層力を入れている。同校では五つのビジネス系検定を積極的に受験していて、昨年度はビジネス電話検定で文部科学大臣賞を受賞した。指導する先生方に、ビジネス系検定を受験する狙いと指導法などについて伺った。

可能性と長所を伸ばして 巣立って行ってほしい

川崎市立商業高等学校は、神奈川県下でも名の知れた商業高校だ。平成22年に商業科、情報処理科、国際ビジネス科を統合し、ビジネス教養科を新設。さまざまな商業科目においてビジネスに生かせる技術や知識の習得を目指す。また実社会を経験する場としてインターンシップや販売実習を導入したり、外部講師の講演を実施するなど、より実践的な学習も展開している。

今年就任3年目を迎える佐藤栄寿校長に、同校が目指す教育についてお聞きした。

「本校には、誠実で素直な生徒がたくさんいます。皆が何事にも一生懸命。そ

した素質を大切にしながら、生徒には在学中に可能性を存分に伸ばして、巣立って行ってほしいと思います。得意分野に力を入れ、自分の長所にする。それが一人一人の自信につながるはずです。自信があれば就職しても、進学しても、各々が持っている力を発揮することができま

す。どのような場所に行っても、どのような状況においても、本校での学びを生かして、実社会で活躍できる人材になってほしいのです」。

歴史を誇る同校で、自分の夢に一步でも近づきたいと考え、入学してくる中学生も多い。

「就職という明確な希望を持って入学してくる中学生は多いです。県内・市内に活躍するOB・OGがたくさんいますから、そうした方たちの影響だと思えます。会計士、税理士を目指す生徒もいて、意欲的に学習に励んでいます」と佐藤校長は話し、こう続ける。

「当たり前前」のことを当たり前前にできる。例えば、あいさつ、礼儀、整理整頓、時間厳守。どれも社会で生きていく上で重要なことばかりです。教員から積極的にあいさつをし、礼儀正しく生徒に接する。教員から生徒へ、先輩から後輩へ。われわれが率先して行動や態度で示すことで、自然と『当たり前』が身に付いていきます。そうした生徒たちが就職後、力を発揮してくれているため、就職先からは『採用してよかった。また来年も人材を送っていたらいい』という声が届いています。今後その期待に応えることが本校の使命だと感じています」。

佐藤栄寿校長。
商業高校に赴任するのは初めて。
「先生方と協力して、商業教育を
邁進していきたい」と抱負を語る

川崎市立商業高等学校。平成29年度に普通科
を開設し、校名を「川崎市立幸高等学校」と変え
て新たなスタートを切る





(右から) 波江野充先生と松浦祐介先生。
二人で試行錯誤しながら、秘書検定の指導に携わっている

グループワークで、 説得力とプレゼン力も習得

同校では早い時期から社会へ出る覚悟と、目的意識を持って歩む力を養うことを目的に、資格の取得や検定の合格に力を入れている。全国商業高等学校協会主催の簿記実務検定などの1級を三つ以上取得している生徒は33名に上る(平成26年度実績)。生徒の努力はもちろん、放課後の補習で検定試験対策の時間を設けるなど、サポート体制は万全だ。

秘書検定をはじめとする五つのビジネス系検定も積極的に導入し、指導に当たっている。主にビジネス電話検定の指導を担当する波江野充先生は、ビジネス系検定の学習で得られることをこう話す。

「五つの検定に共通して言えるのは、学習した内容が必ず実社会で役に立つということです。実務的な内容が多いため、学習すること自体が社会人の準備になります。ビジネス系検定を学ぶことは就職活動を始める生徒はもちろん、進学する生徒にとっても有益

です。ゆくゆくは誰もが社会に出て働くわけですから、学んでおいて損はありません」。

ビジネス系検定の講座は、3年生の「課題研究」で開講される。年度によって開講されない検定もある中で、継続的に開講されているのが「秘書検定講座」だ。「秘書検定初級」では3級を、「秘書検定上級」では2級に挑戦する。上級の生徒は11月に準1級にも挑戦する予定だ。

「今年度は特に秘書検定を希望する生徒が多かったです。1、2年生のときに任意で3級を受験した生徒が、上位級を目指して『秘書検定講座』を受講してくれています。また3級に合格しているクラスメートを見て、『挑戦してみよう』とやる気になった生徒も多いようです(波江野先生)。

同講座の指導は波江野先生の他に、松浦祐介先生も担当している。指導法をお聞きした。「グループワークが中心です。6名前後のチームを作り、テキストで習得した知識をもとに問題を解き、チームの解答を発表させます。自分が正答だと思った選択肢をチームの解答とするためには、チームメートに説明し、説得する力が必要です。上手く説明できなかつたり、発言できなかつたりすると『3番が正答だと思ったけど、説得されて2番がチーム解答になった』となる。プレゼンテーション力やコミュニケーション力の弱さに気付くきっかけになります。グループワークを繰り返すことで着実に説得力とプレゼン力が身に付くのです」。

グループワークを導入することで、全員が加意意識を持って取り組めることも成果の一つ。またゲーム感覚で授業が進むため、生徒たちは楽しそうに参加しているようだ。

日誌の活用も特徴的だ。授業の終わりに記入する講座用の日誌には、その日学んだ内容と来客応対、電話応対などのやりとりが一言一句書かれていた。カラーペンやイラストを用いるなど、それぞれ工夫を凝らしてまとめている。「日誌があればいつでも振り返ることができ、まとめる力も付く」と松浦先生は話し、さらに「実技の習得にも力を入れている」と続ける。

「名刺交換、来客応対、お茶出し、お辞儀の練習などは、一連の流れを録画して確認しています。全員で動画を見て、『お辞儀が浅い』『猫背で姿勢が悪い』『寝癖が気になる』などと指摘合います。クラスメートに指摘されて気付くこともありますし、自分の動作を自分の目で見て気付くこともあります」と話す松浦先生の横で、大きくうなずく波江野先生。

「夏休みが過ぎて就職試験が本格的に始まると、検定試験へのモチベーションが下がる傾向にあります。しかし実技を取り入れることで、働く上で必要とされる立ち居振る舞いを習得し、就職試験にも生かすことができる。学びが役立っていると感じれば、検定試験への意欲を維持することができます。実践的な授業を展開することでやる気が保てて、実技も身に付く。学ぶタイミングと指導内容が合致しているの

最新事情 ③7 川崎市立商業高等学校



(上) 外部講師を招いて実施した講習の様子。
(下) 産業教育フェアでは、川崎銘菓を販売した



「と波江野先生は実技指導の意味を語る。

異色なのが靴磨きの指導だ。松浦先生のアイデアだというのが、「靴磨き」とは何だろうか。

「卒業式間近に生徒に教えていることです。革靴を磨くキットを用意し、ピカピカにする方法を教えます。卒業式に足元がきれいに光っている生徒は一目で受講者だと分かります。卒業式に限らず、入社式や入学式などの大事なときにいい、よい気持ちになることを実感するようにです。皆、楽しそうにやってくれています。教わる機会はなかなかないと思うので、ぜひ覚えて卒業してほしいですね(松浦先生)。

松浦先生は同校に赴任して今年6年目。前任教で秘書検定の指導に携わった経験をもとに、日々オリジナルの指導法を模索している。

秘書検定講座を受講した生徒からは「社会で求められる常識、自分の意見を相手に伝える力、

ノートをまとめる力が身に付いた」「電話応対、来客応対などの実技練習がためになった」「数ある検定の中でも、より実践的な内容が学べるのがこの講座だと思う」「受講したおかげで、好印象を与えてよい人間関係を築くことができると思う」「卒業までに2級合格に向けて頑張りたい」など意気込みや感想が届いている。

電話応対実習で
苦手意識を持たせない

波江野先生と松浦先生が、ここ数年、重点的に指導しているのが電話応対である。波江野先生はその理由をこう話す。

「卒業生から『電話を取るのが怖い』と相談を受けたことがあります。電話を取るのには新入社員の仕事ですから、誰もが避けては通れない道です。一度苦手意識を持つてしまうと、克服するまで時間がかかります。ですから卒業までに少しでも慣れてもらいたいと考え、意識して指導するようになりました。」

「てるコーチ」と呼ばれる機械を使い、電話応対を実践する。受け答えのパターンを書いて覚えた後、実際に声に出して言い回しを練習。機械で自分の声を録音し、確認する。

ビジネス電話検定の内容も活用している。昨年度は「秘書検定講座」を受講した36名がビジネス電話検定にも挑戦し、見事、文部科学大臣賞を受賞した。

「受賞は生徒の努力の結果だと思います。卒業後、生かしてほしいですね。実際に卒業生は『研修のときに電話応対を褒められた。高校生のうちに勉強できてよかった』と言ってくれています。やはり電話応対のスキルは必須。力を入れて指導してよかった」と振り返る松浦先生。波江野先生はその成果を踏まえて、生徒に対して次のように期待を込める。

「秘書検定講座を受講した生徒の多くが、『自信につながった』と言ってくれています。しかし、敬語の使い方がまだうまく使いこなせていませんし、不安要素がたくさんある。電話応対を含めたビジネス系検定で知識を習得するだけではなく、確実に実社会で生かせるスキルを身に付けてほしい。勉強したことは、社会に出たときに必ず役立ちます。そうしたことを伝えていきながら、今後も指導を続けていきます。」

資格の取得や検定の合格に力を入れて取り組む同校。合格という目標の他に、もう一つ大切なことがあると佐藤校長は話し、決意を聞かせてくれた。

「生徒には資格の勉強や、検定を学ぶ意味をしっかりと理解して、チャレンジしてほしいと思います。なぜ学ぶ必要があるのか。学んだことはどういうときに、どのような場所で生かすことができるのか。いずれ経験する実社会を見据えて、多くのことに挑戦してほしい。われわれ教員は、その挑戦を精いっぱい支えていきたいと思っています。」